1 ボランティアは生きる姿勢

ボランティアとは、見過ごせない社会の課題に気づいた人が、その解決に向けて自らアクションを起こすことだ。誰かが不当に不利益を被っている状態や、少数者の声が届かない事実に直面したときに、見て見ぬふりをできない人が何らかの行動を起こす。もちろん、何も行動をしない人もいるので、あえて行動する人を「ボランティア」と私たちは呼ぶ。

気づいてしまった社会の矛盾に対して、放っておけずに行動することは、その人の自発的な選択であり生きる姿勢だといえる。

2 あらためて個人の〝ちから〟に注目

大阪ボランティア協会では、創立50周年にあたる2015（平成27）年に向けて、「市民社会にとって、今、必要なこと」を〝将来ビジョン〟にまとめた。そのなかで、今、あらためて個人の行動・参画を重視し、共感を基盤とした市民活動団体が成長し、活躍することが必要だ、という考えを示している。

というのも、市民活動をはじめとする社会変革の原点は、個人のボランタリズムを出発点とするものであるし、さらに多くの社会変革も、結局、個人の判断、個人の行動変容をともなわなければ、その内実を持たないからである。

社会のあらゆる場面を構成する個人の〝ちから〟をエンパワメントし続けることが、市民社会の実現に近づく着実な道程だと私たちは確信している。

A Contribution ②

社会福祉法人
大阪ボランティア協会

市民活動の原点は
個人の“ちから”

事務局主幹
永井美佳

3 個人の〝ちから〟を束ねて、地域や社会を変える

行政や企業が見逃してしまうニーズに対して、地域や社会で生きる者として、どうしても後には引けないことがある。そのニーズの存在を、まだまわりが気づいていない状態でもあきらめずに訴え続けることで、課題に気づいた個々人の想いがつながり、価値観をわかちあえる仲間に出会えだす。

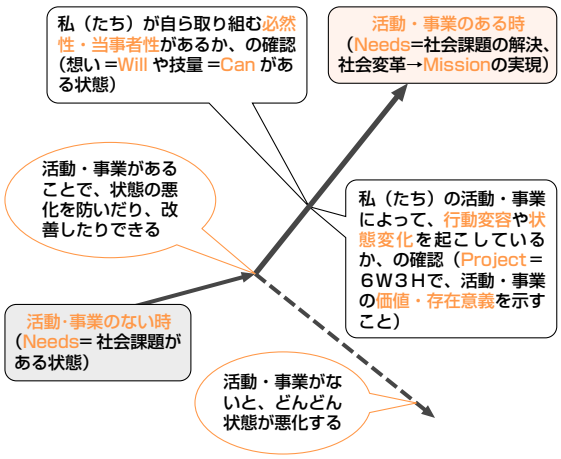
志を同じくする一人ひとりの〝ちから〟を組織の〝ちから〟と結び、やってみようと覚悟を決めれば、後はことをどう進めるかだ。知恵と工夫を結集して、課題の解決にあたっていけばよい（下図参照）。

こうした市民活動が、時代の要請にマッチしていれば、活動・事業は拡大・継続し、社会的な認知も広がり、社会を変える原動力となるのだろう。

4 社会変革を起こす闘志を燃やせ

ところで、日常的な活動現場で、日々寄せられるニーズに応えることは大切だが、それをこなすだけでは活動は発展しない。未来のニーズに応える事業を市民の目線で開発し、仕組みづくりや環境整備を実験的・開拓的に取り組むには、中長期的な視点で活動や事業のあるべき姿を示すビジョンが必要だ。

スケールの大きなビジョンは、一組織ではなく、ジョイントで描くのもおもしろい。各々の持ち味を最大限に活かして、化学反応で新たなものを生み出すのだ。

先駆的な取り組みに果敢にチャレンジすることは、フロンティア（開拓者）としてのリスクを伴うが、恐れたり後回しにしたりすることなく、むしろ、そのプロセスを楽しんで社会変革を起こす闘志を燃やしていたいものだ。

【活動の価値を見えるカタチに】
社会課題の解決や社会変革を起こせるか？